



寺山修司研究—アングラ文化における言語表現—

劉, 夢如

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2026-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7944号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007944>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

寺山修司研究—アングラ文化における言語表現—

氏名：劉夢如

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 梶尾 文武 准教授
(副) 樋口 大祐 教授
(副) 大橋 完太郎 准教授

寺山修司（一九三五～八三）は、一九六〇年代から八〇年代にかけて、演劇をはじめ映画、ラジオドラマ、詩、短歌、俳句、評論など多ジャンルで活躍し、アンダーグラウンド文化の旗手となった表現者である。寺山の旗揚げによって創立した演劇実験室天井桟敷は、一九六七年から解散の一九八三年まで、実験的な演劇活動で注目を集めた。初期の見世物、市街劇と野外劇、密室劇、古典作品の翻案などが、寺山の演劇作品群を構成している。

文学から出発した寺山修司は、天井桟敷の創立をもって演劇の実践へと転身し、「文学ばなれ」を唱えはじめる。この理念には、言葉を制度として捉え、演劇を言葉の外部へと離脱させる志向が見られる。しかし、彼が目指した「文学ばなれ」それ自体も饒舌な演劇論と言語論、言語表現が豊かな作品によって支えられている。寺山自身は「文学ばなれ」の不可能性を認識し、ここに「言葉によって呼び出した世界の人達としか出会っていない演劇の不毛性」と認めつつも¹、多岐な手法を通してこの逆説的な試みを継続したのである。本研究は、寺山の「文学ばなれ」のプロセスに注目し、寺山の「台本」をはじめ、古典の現代語訳や長編詩などの言語表現を主要対象として考察を展開してきた。

第一部では、寺山の「密室劇三部作」における「始源の言葉」という問いについて考察した。

第一章「戯曲「阿呆船」論—演劇の不毛性—」では、戯曲「阿呆船」（一九七六）がミシェル・フーコーの『狂気の歴史』（新潮社、一九六五）から、「外の思考」や「阿呆船」のモチーフを得たことを考察した。寺山作品が、「外」の存在を論ずる六〇年代のフーコーの言説から影響を受けながらも、「外」の存在を否定する七〇年代のフーコー言説に接近していることを検討した。山口昌男の「道化」論が寺山作品に影を落としたことを考察した。登場人物の「眠り男」と「影の男」における「未分化」の傾向が、「零度の理性」を喩えていることと、「黒衣」が劇中劇という構造を提示していることを分析した。それを踏まえ、寺山が言う「演劇の不毛性」という、「文学ばなれ」の不可能性についての問題意識を明らかにした。

第二章「戯曲「疫病流行記」論—「行為」と「経験」としての沈黙—」では、戯曲「疫病流行記」（一九七五）において、疫病のように蔓延し、伝染するのは、病そのものよりも想像力あるいは言葉であるというテーマに注目した。登場人物が「役」から「役を演じる俳優」への転身、「台本担当」や「舞台監督」などの劇場のスタッフの登場による劇中劇の構造を指摘した。この構造が、想像力あるいは言葉の伝染という主題をいっそう強意し、言語批判を示していることを指摘した。それを踏まえ、劇中に反復される「釘を打ちこむ」という行為に着目し、言葉の役割が言語表現ではなく、行為に託されるというモチーフを考察した。作品の最後に、疫病のような言葉に汚染されていない無人島が現れるが、そこに、行為という真の言葉が「始源的なもの」として捉えられることを検討した。

第二部では、寺山作品の「古典への回帰」という傾向を、シナリオ・戯曲・古典現代語訳のテキストに基づいて考察した。

第三章「シナリオ「草迷宮」論—分裂の構造—」では、寺山のシナリオ「草迷宮」（一九七八）と泉鏡花の原典との間テキスト的な関係を明らかにした。特に鏡花原典における母への幻想についての表現・美女菖蒲についての表現と、寺山のシナリオにおける母の発話、美少女美登利についてのト書きを比較した。同時代の澁澤龍彦からの影響、パシュールの思想の受容を文脈的に考察した。このシナリオに見られる分裂の時空構造、主人公明をはじめとする登場人物のイメージの複数化、魔性と母性が共存する黒門屋敷・水・球

体のシンボルの多義性を解明した。

第四章「戯曲「身毒丸」論—コラージュとしての見世物—」では、戯曲「身毒丸」（一九七八）と説教節「信徳丸」「愛護若」とを比較し、説教節から流用した寺山作品のテキストを確認した。登場人物の「継母」の形象が「蛇娘」「鬼子母神」「徳利娘」「遊女」に複数化することを分析した。寺山流の流離譚における、松田修の流離譚の論考・山口昌男の「道化」説・ミシェル・フーコーの「狂気—理性」の言説との繋がりを確認した上で、「畸形」や「見世物」といったキーワードが喚起する差別問題を考察した。寺山の翻案におけるコラージュのような手法を例証した。

第五章「古典現代語訳『新釈稲妻草紙』論—言葉の中の分身—」では、江戸戯作者山東京伝の読本『昔話稲妻表紙』（一八〇六）の現代語訳としての『新釈稲妻草紙』（一九七四）を考察した。二作のテキストを精査した上で、寺山の書替えた箇所を確認した。原作の登場人物が善悪対立の性格を持っているのに対し、寺山作品の人物の二元的性格が曖昧化されることを検証した。寺山作品が「下ネタ」の要素と「物真似」の手法を通して笑いを取り、原典の規範を破る性格を持つことを明らかにした。書替えによって加わられた人物が「言葉」の中にしか登場してこないため、『新釈』の物語世界が「言葉」から離れられないこと、言い換えれば「文学離れ」の不可能性を示していることを考察した。

第三部「寺山修司と同時代の表現者」では、寺山と同時代のアングラ文化の表現者とのつながりを整理し、寺山をアングラ文化において位置づけることを試みた。

第六章「土方巽「病める舞姫」と寺山修司長編叙事詩「地獄篇」—非制度と反制度—」では、舞踏家の土方巽の「病める舞姫」（一九七七～七八）と、寺山の「地獄篇」（一九六三～六五）とを東北の風土に根ざすテキストとして捉え、二作の共通点と相違を検証した。回想の手法、「眼球」のモチーフによる自己の脱主体化、「見えない」ものに操られるからだなどの点において、二作が共通していることを指摘した。寺山のテキストが先行作品として、土方作品への間テキスト的な影響を試論した。しかし、寺山作品が社会的文化的な制度に疑う反制度の傾向を持っているのに対し、土方作品が自然に馴染み、社会や文化から離れた非制度の傾向を持っていることを考察した。

第七章「小劇場運動第一世代の言語論と台本—始源の言葉—」では、小劇場運動の新劇批判と、新劇の劇作家による反批判を整理した。それを踏まえ、別役実・鈴木忠志・唐十郎・寺山修司・太田省吾といった小劇場運動の代表的な劇作家の演劇理論と台本を読み比べた。彼らが試行した戯曲の構造の複数化、俳優の主体を重んじたパロール、即興、沈黙などの方法を考察した。従来の戯曲が前提としてきた文学性の主導権を否定した小劇場運動の演劇実践は、しかし、まさにその饒舌な理論によって反文学の不可能性を示している。代表的な小劇場運動の劇作家らはこの敗北を自ら認めながら、意味伝達の中心化する文学を超え出る「始源の言葉」（寺山）を模索し続けたことを明らかにした。

付録「雑誌『地下演劇』（一九六九～一九七九）総目次・執筆者一覧」では、寺山が編集に携わった『地下演劇』という演劇理論誌の目次と執筆者を整理した。そこに寄稿していたのは、同時代の各ジャンルの文化人である。演劇の領域では、芥正彦・堂本正樹・山崎哲、映画の領域では、篠田正浩・飯村隆彦、美術の領域では、横尾忠則・高松次郎・中村宏・粟津潔、舞踏の領域では、土方巽・笠井叡・暦赤児、文学の領域では、澁澤龍彦・高橋康也・松田修、写真の領域では、中平卓馬・荒木経惟・森山大道、人類文化学研究では、山口昌男、また評論家である利光哲夫・扇田昭彦・松田政男・市川浩・松永伍一・三

浦雅士・津村喬・市川雅・東野芳明・宇波彰などが『地下演劇』に寄せていた論考を一目瞭然に整理した。

以上は、各論の概要である。しかし、現段階で課題を積み残した。序章では、寺山の演劇作品群を、概ね初期戯曲、市街劇と野外劇の時代、密室劇の時代、古典翻案の時代という四つの時期に分けて取り上げている。第一部、第二部の各論は、主に密室劇・古典の翻案に着目したが、初期戯曲・市街劇についてはまだ確実に検証できていない。寺山の演劇作品を扱う際、それらを「演劇」と呼ぶべきか、「戯曲」と呼ぶべきか、迷うことが多かった。そのため、目の前にある活字資料を対象とし、「台本」という言い方で対応している。だが、「台本」の創作者は寺山だけではなく、その時その場で劇場に実在した集団である。いかに「寺山修司」を主語として正確に使うか。本研究は、なるべくこれらの問題を意識しながら、研究対象にアプローチしてきたつもりである。

寺山の表現活動は多岐にわたる。本論文はその戯曲を中心に、シナリオ・古典現代語訳・長編詩を論じてきたが、まだ検討できていない演劇の作品と他のジャンルの作品が多数ある。また、寺山演劇を論ずるには、同時代の小劇場運動の作家の作品、同時代の新劇の作品、さらに他の時代の演劇を比較項として読む必要がある。このように未解決の課題がまだ残っているが、著者は本論文が寺山修司研究の一つの小さな成果になることを望んでいる。この成果は結果ではなく、今後の継続的な研究の出発点となるはずである。

¹ 寺山修司×岸田理生×小竹信節×浅井隆×樋口隆之×森崎偏隆「阿呆たちは故郷をめざす」、『地下演劇』第一一号、一九七七・五

論文審査の結果の要旨

氏 名	劉 夢如
論 文 題 目	寺山修司研究—アングラ文化における言語表現 —
要 旨	<p>本研究は、一九六〇年代から七〇年代にかけての寺山修司の表現活動を考察対象とする文学研究である。寺山は、劇団天井桟敷を拠点として同時代の演劇界に小劇場運動を巻き起こし、いわゆるアングラ文化を牽引した存在として知られる。寺山をはじめとする小劇場演劇第一世代については、学術研究の場で未だ十分に論じられておらず、その方法論についても探索されている。そうしたなかで、本論文は上演のために著された寺山の言語テキストを丹念に読み込むことで、その創作に新たな光を当てようとする意欲的な試みであると言える。序章は、寺山が劇団天井桟敷の活動を通して「文学離れ」を語ったことに着目し、これを論文全体を刺し貫く問題として設定する。これに続き、本論は全三部から構成されている。</p> <p>第一部「『始原の言葉』の問い」では、「密室劇三部作」と銘打たれた天井桟敷の演劇作品のうち二作を論ずる。第一章「戯曲『阿呆船』論—演劇の不毛性」は、藍本となったプラント『阿呆船』とそれを論じたミシェル・フーコーの『狂気の歴史』、あるいは山口昌男の道化論が寺山に及ぼした影響について検証を進めつつ、寺山の「阿呆船」に設定された劇中劇の構造が「演劇の不毛性」をあえて露呈させるようなニヒリズムを打ち出していることを指摘する。</p> <p>さらに第二章「戯曲『疫病流行記』論—「行為」と「経験」としての沈黙」は、デフォー『疫病流行記』（『ペストの記憶』）を藍本とする寺山の「疫病流行記」を論じ、想像力の伝染という主題、役者たちの無言の行為への傾斜、作品に設定された劇中劇の構造にアプローチする。現状では、第一章に比べ完成度は落ちるが、疫病という今日においてアクチュアルな主題に取り組む論点として興味深い。</p> <p>第一部のテキスト分析を経て提示された著者の見解によれば、寺山の密室劇の試みに通底するのは、言葉という理性的あるいは制度的なものを越えた「始原の言葉」の、演劇作品内部における探究である。ただし、この探究の成否に関する評価は、現段階では半ば棚上げにされており、今後さらに明確に判断を押し出す必要があるように思われる。また、寺山のこうした探究は、六〇年代末に噴出した「反理性」あるいは「反制度」の言説と通底しており、考察対象とした二作の藍本がその有力な発信源となった現代思潮社の「古典文庫」から選ばれていることも注目すべきだろう。「古典文庫」の選出には遊澤龍彦が深く関与したことが知られるが、遊澤と寺山の関係については続く第三章で取り上げられるものの、第一部ではあまり問題とされていない。同時代のラディカルズムにより内在した検証の深まりが期待される。「密室劇三部作」の残る一作「盲人書簡」の研究にも取り組む必要があるだろう。</p> <p>第二部「古典への回帰」は、古典作品を下敷きとした寺山の複数ジャンルの創作実践を検討する。第三章「シナリオ『草迷宮』論—分裂の構造」は、泉鏡花の小説「草迷宮」のアダプテーションの試みである映画「草迷宮」について、そのシナリオを論ずる。錯時法を多用し螺旋状の時間構造を具備した鏡花作品を受けて、映画「草迷宮」は主人公の幼少期と現在を共存させていることに本章は注目する。このような主人公やその他の登場人物の分裂、反復される球体や水のモチーフ、母の幻想について、バジュールや遊澤龍彦を参照しつつ検討している。寺山の想像力の形質をデマティスムの手法によって捉える論点として評価できる。</p> <p>第四章「戯曲『身毒丸』論—コラージュとしての見世物」は、説教節「信徳丸」「愛護若」のアダプテーションの試みである演劇作品「身毒丸」を取り上げ、その戯曲を論ずる。松田修の古典評論や山口昌男の道化説、折口信夫「身毒丸」等の影響を考証しつつ、本作でも登場人物の分裂・複数化が試みられていることを指摘し、近親相姦の主題、見世物としてのフリースを前景化する本作の問題性を剔抉する。なお、シナリオ「草迷宮」と戯曲「身毒丸」は、いずれも寺山と岸田理生による共作である。両者の分担範囲を確定することは難しいだろうが、二作に寺山にオリジナルの方法や思想を見ることには、より慎重であるべきだろう。検討に際しては、寺山のみならず岸田に関して提起されている先行研究がより丁寧に参照されるべきである。</p> <p>第五章「古典現代語訳『新釈稲妻草紙』論—言葉の中の分身」は、山東京伝『昔話稲妻草紙』の寺山による現代語訳の試みを論ずる。</p>
主査記載 氏名・印	樋口 大祐

原典との比較を通じて、寺山の訳文が新たに追記・改変した部分を炙り出し、登場人物の分裂、スカトロジックなイメージの付与、善悪二元論の攪乱といった要素に寺山の創作を見る。本章は演劇の問題からは離れているように見えるが、寺山の場合、人物の分裂という演劇の方法が、身体的なパフォーマンスよりもむしろテキスト言語から帰結されていることを裏付ける論点である。

第四章では折口信夫が参照枠のひとつとなっているが、より広い視野に立てば、日本民俗学に着目した同時代の作家としては、古井由吉、後藤明生、中上健次といった名が挙げられよう。また、第五章で検討された寺山訳『新釈稲妻草紙』を収める現代語訳全集『日本の古典』（久松潜一編、河出書房）では、福永武彦、中村真一郎といった先行世代の作家のほかにも、同世代の作家からは野坂昭如が訳者に名を連ねる。古典回帰は七〇年代文学の通奏低音となった現象だが、第二部は、この文脈では注目されることの少なかった寺山修司をその一角に位置づける視野を提供していると言える。今後は、そうした俯瞰的な視点から寺山における古典回帰の固有性をより明示することが求められる。

第三部「寺山修司と同時代の表現者」は、寺山を中心としたアングラ文化、小劇場運動の人脈を辿りながら、それらに通底する表現意識と方法論を探る。第六章「土方巽「病める舞姫」と寺山修司長篇叙事詩「地獄篇」—非制度と反制度」は、戦後アングラ文化の始祖とも言うべき舞踏家・土方巽と寺山との関係を、テキストの相互連関に即して論ずる。寺山の自伝的散文「地獄篇」と、そのおよそ十五年後に土方が著した同じく自伝的散文「病める舞姫」を比較し、少年時代の自己自身を「ぼくの少年」「私の少年」という所有格の下に語る叙法や、眼珠摘出のモチーフといった共通点を析出した上で、両者の差異を論ずる。ここで示唆されているのは、寺山の散文の筆法が土方のそれに与えた影響である。現段階では平面的な比較対照にとどまっているが、その影響関係をより説得的に論証することが求められよう。土方における「東北」という風土の問題についても従来のクリシェをなぞっているという印象が否めず、慶應義塾大学アート・センターの土方巽アーカイヴ等を活用しつつより厚みのある考察を展開することが今後は期待される。

第七章「小劇場運動第一世代の言語論と台本—始原の言葉」は、同時代の劇作家の言語論を考察対象とし、別役実、唐十郎、鈴木忠志、太田吾吾らと比較しつつ寺山の位置を見定めている。本章は台本を「言語論」の水準へと還元することを主眼とした結果、それぞれの作品の物語や人物造形といった具体的な内容を捨象しており、個々の作品論として成立しているとは言いがたい。また、戯曲中心主義に傾いた新劇との比較という観点を十分に対象化しえていないため、新劇に比べて小劇場運動における台詞を貧しいものとする外在的批判を無条件に受け入れている点も瑕疵であろう。本章は、小劇場運動の展開のなかに寺山を位置づける見取り図としての性格が強く、結論ではなく序論とすべき内容であると言える。しかし、劇の問題を超えた「言語論」という普遍的な問題設定に着目したうえで、劇作家たちの「言語」をめぐる問いの布置を描き出し、それぞれの劇作家たちの台本の解釈を通してそれを裏付けた点は評価できる。

付録として、寺山が編集を手掛けた雑誌『地下演劇』の解題と総目次を付す。解題としてはやや手薄だが、演劇理論誌としての性格の濃厚な本誌に関する調査結果は本論の随所で活用されており、いわば本研究の資料的基盤となっている。以上のように、本論文はテキスト分析の際に、さまざまな理論的な補助線を引くことで、作品解釈に広がりを生んでいる点が評価される。一方で、分析作品が上演を前提に書かれた戯曲であることへの目配せは十分とは言えず、先行研究の踏まえ方にも不足が目立つ。そうした点は今後の課題と言える。

本論文は、寺山修司が一九六〇年代以降の表現実践をとおして喚起した「言葉」への問いをアングラ文化とのかかわりにおいて論じた貴重な成果である。上記のような評価に鑑み、本審査委員会は、論文提出者・劉夢如氏が、博士（文学）の学位授与にたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	樋口 大祐	副査	助教	有澤 知世
副査	教授	鈴木 義和	副査	近畿大学 准教授	梅山 いつき
副査	准教授	梶尾 文武			